

- ◆小中学校の部**
- ◆仙北市長賞
西明寺中学校3年 木元凜咲
◆角館図書館後援会長賞
生保内小学校1年 鈴木椋子
- ◆仙北市教育長賞
◆新潮流文庫賞【特別賞】
角館中学校 2年 草薨陽菜
- ◆奨励賞も受賞
生保内小学校1年 堀川松梨
生保内小学校2年 佐藤寧音
西明寺小学校4年 佐藤呼幸
白岩小学校 4年 木村光来
神代小学校 6年 小原理子
神代小学校 6年 平岡結季
角館中学校 2年 草薨陽菜
生保内中学校3年 浅利夏音
- ◆入選
角館中学校3年 渡邊愛生
角館中学校2年 佐藤寧音
西明寺小学校4年 佐藤呼幸
白岩小学校 4年 木村光来
神代小学校 6年 小原理子
神代小学校 6年 平岡結季
角館中学校 2年 草薨陽菜
生保内中学校3年 浅利夏音
- ◆仙北市長賞
角館中学校3年 渡邊愛生
◆角館図書館後援会長賞
角館高校1年 佐々木明果
◆新潮流文庫賞【特別賞】も受賞
◆仙北市教育長賞
角館高校3年 小松愛歩
◆新潮流文庫賞【特別賞】
角館高校1年 佐々木明果
◆奨励賞
角館高校1年 佐藤優美
角館高校3年 坂本希曼
◆入選
角館高校1年 猪本真央
角館高校1年 高橋幸

令和3年度

仙北市読書感想文コンクール



令和3年度仙北市読書感想文コンクール(仙北市教育委員会主催、角館図書館後援会・(株)新潮社後援)が行われ、応募総数109点の中から仙北市長賞に小中学校の部は木元凜咲さん(西明寺中学校3年)、高校の部は渡邊愛生さん(角館高校3年)が選ばれました。仙北市長賞の受賞作品について、それぞれ原文のままご紹介します。

仙北市長賞

小中学校の部



「小さな神たちの祭り」を読んで
西明寺中学校3年 木元凜咲

あとがきから。「亡くなった方々は、実はどこかで生きているのではないかと私はそう思うことがあった。ありえない願望だといわれても、それは私の心を安らげた。もしも家族や大切な人を失った人たちも、そう思えたら安堵するのではないだろうか。」私は、筆者のこの考えに強く共感することができ、すぐに読みたくなった。これが、この本との出会いで、読み終える頃にはあれほど心が動かされると思ってもいなかった。

二〇一一年三月十一日。家族全員が津波に吞まれてしまい、今も消息不明。立ち直れずにいた主人公、晃は、大学は卒業したものの「飛び込み」や「テレアポ」という仕事をして働くが成績を残せず、つらい日々を送っていた。ついには社長にまで嫌味を言われてしまった。晃は自分の家族が震災にあったことは誰にも言っていない

仙北市長賞

高校の部



「出会い」
角館高校3年 渡邊 愛生

「人」という字は、人と人が支え合って成り立っている。昔、国語の時間によく聞いた言葉だ。当時はよく理解していなかったが、この本を通して、その意味が分かった気がした。

この本を初めて手に取り、読み始めた時、わくわくしていた。曲も楽譜も分からないはずなのに、メロディーに乗っているかのような感じさえあった。こんなに駆け抜けるように読み味わえる感覚は初めてだった。

主人公のほのかは、家庭が貧しいことを理由に同級生からいじめられていた。そんなある日、ピアノの先生である二ノ宮がほのかを助ける。彼は、鍵盤が描かれたスケッチブックをほのかにあげた。その「紙のピアノ」と二ノ宮の指導が、ほのかのピアノへの道を開いた。次第に彼女は、世界最大級のピアノコンクール「ショパンコンクール」への出場を目指すようになる。

た。このことに、少しではあるが共感することができた。

私も小学生の時、父が亡くなった。そのことはクラス全員が知っている。でも、たとえどんなに仲のいい友達だったとしても、自分にとっては大きな悲しみがあり、他の人からすれば励まそうとしても、多少かもしれない気が遣ってしまふ。そして、関わりにくいことだっている。だからそういう話はあまりするべきではないと私も感じていた。

八年がたったある日、晃の父、行雄がタクシーで現れ「あの世の地元」と呼ばれるところへと連れていかれる。そこには震災前と変わらない家族や小さい子供、お年寄りがいて、家々が立ち並びその土地ならではの思い出が詰まっていた。そこでは、みんなが元気に暮らしていた。

父が亡くなった後、近所の方でも亡くなる方が多かった。それはとても身近な人で悲しかった。同級生のおぼあちゃんや、一個下の子のおじいちゃんだ。でも、もしあの世にも本当に「あの世の地元」があるとすれば、「みんなは元気にやっているのかな」と思うことができたとき、心は楽になった。でもその一方で若くして空へ行ってしまったことで、父のおじいさんや友達のおじいさん、おぼあさんがた

くさんいるばかりで、いつも一緒にいた人がいるのではないから、悲しくないのかな。とも思った。

「あの世の地元」での弟、航との会話で、

「生き残った者に力を与えるのが、死んだ者の使命。」
「兄貴、頼むよ。生き残ったやつらが元気づけないと、俺たちも死んでも死にきれないんだよ。」という話をしていた。

私はこの、「生き残った者に力を与える」というところが、本の中ではあるものの、現実でも同じようなことを言っているような気がした。私も晃のように、全く立ち直れずにいた。でも、みんなの前では明るく、いよと思った。そんなとき、たくさんの人に、「大丈夫だよ、ずっとみてくれてるから。」という言葉をたくさんかけてもらった。でも、そんなことは誰だつて言うことはできる。もちろん、ありがたいとも思う。また、頑張らないといけないんだよな」とも思う。けれども、この本の、特にここを読み終えたときから、どんなに小さなことでも、「今日一日、よろしくお願います。」「ありがとう、ごいします。」と、朝起きてから寝る前に、毎日必ず仏壇に手を合わせるようになった。

また、「あの世の地元」と呼

ばれている世界から、晃本人が暮らしている元の世界、現実の世界へと帰るとき、父がかけた言葉にはたくさんの思いがあったと思った。

「人はな、命をつないでいくことが大事なんだ。生き残ったヤツは、元気に繋いでいく務めがあるぞ。こっちは来たヤツらは、繋いでいく人間を守り、元気にする務めがあるんだ。」

亡くなってしまった人は、「もう、いない。」なんかではない。あの世から私たちのことを見てくれている。応援をして、背中を押して、勇気を与えてくれる。「あなたは、その人がこの世に生きていたあかし。」少しづつでいい。今もたくさんの人達に、支えられて生きている。だから、一つ一つの些細なことにも感謝したい。今まで出会った人が、その場所やその地域、その世界にいるかどうかということは関係ない。下ばかり向いていては悲しんでしまう。晃の父の言葉は、父から伝えられた言葉のよいうな気がした。この本に出会えたことが奇跡。前を向いて進んでいこうと思うことができた。

◆読んだ本
『小さな神たちの祭り』
(潮出版社)

互いに高め合っていく。誰かと出会うという事は、今までの自分の世界に、新しい色加わることだと思ふ。その新しい色、新しい世界を、私たちは大切にすべきだ。

「人」という字は、人と人が支え合って成り立っている。その「支え」の中には何があろう。思いやり、競争心、尊敬。どんな感情だったとしても、それは誰かに出会うことで生まれる。そして、それらを育てることで、自分の成長に結び付く。そうやって人は、人生を豊かにしていく。私は、この本を読んで強くそう思った。

私にはこれから先、一体どれくらいそんな出会いがあるだろう。舞華のように、想像もできなかったような仲間やライバルにも出会うかもしれない。その時は、ほのかや舞華のようでありたいと思ふ。自分自身の夢や軸、想いを揺らすことなく、正々堂々とぶつかっていききたい。共に過ごせることに感謝しながら、一歩一歩、成長し続けたい。この一冊の本を通して、私の世界もまた、色づき始めた。

◆読んだ本
『紙のピアノ』(双葉社)